

みんなの「なんな一の？」を伝えるこども記者のための新聞(毎月1回発行)



信毎こども記者ニュース

こども記者クラブ(信濃毎日新聞地域活動部) 〒380-8546 長野市南県町657
TEL 026-236-3110 FAX 026-236-3193 電子メール t-chiiki@shinmai.co.jp

no.38

信毎こどもスクール



今から何千年も前の縄文時代。人びとは大自然の中で、どんなくらしをしていたのかな？ 電気もガスもない、そんな大昔のことを、体験しながら学ぶ信毎こどもスクール「縄文の夏祭り」が7月21日、茅野市尖石縄文考古館一帯で開かれました。黒曜石をナイフに加工して調理をしたり、土偶を作ったり、縄文の衣服を身に付けて踊ったり… さまざま体験をして感じた縄文のくらしの魅力を、こども記者たちがリポートしてくれました。

原村3年 田淵稀 記者

自然の道具でおいしい料理



ほくは、「縄文の料理」班に参加しました。まず、火をおこしました。木でできている「火きりうす」と「火きりぎね」という道具で火をおこしました。ぼうが回るとまさつで火がおきるしくみです。回すところがずれて、火がつかせませんでした。ずっと回していたら、うでがいたかったです。

次に、黒曜石でナイフを作りました。黒曜石は、すき通って見えて、ガラスみたいな石です。黒曜石は、石やシカのついでに思いきりたたいてもわれませんでした。けれども、石のむきとたく場所を考えてたけば、かるい力でうまくくれました。うすくはがれた黒曜石は、カッターナイフのように切れました。そして、このナイフで魚をさばきましたが、このナイフがあれば縄文人も魚を上手にさばけたと思います。

さいごに、おこした火をまきにうつして、石をやきました。そして、あつあつの石をつかって肉をやき、魚もくしにさしてやきました。ほかにも、あつあつの石とアルミホイルにくるんだサツマイモを土にうめて、石やきいもを作ったり、土器の中に入れた水に、あつあつの石を入れてホウレンソウをゆでました。作った料理を食べてみたら、しおやしうゆがなくてもおいしかったです。

身近にある自然の材料をつかって、縄文人は、べんりな道具を作っていました。縄文人は、ガスや電気がなくても自然の道具でおいしい料理を作っていたんだと思いました。



縄文の豊かなくらし実感！



小諸市6年 柳沢星奈 記者

縄文のビーナス とても難しい！



体験学習では、講師の苅谷俊介さん(俳優・日本考古学協会会員)といっしょに縄文のビーナスをつくりました。苅谷さんはとても集中して上手につくっていらっしゃいました。

縄文のビーナスは、細かいところが多くあり、手ではできないところは竹ぐして、とものをつかいはけてつくりました。約5000年前につくられた縄文のビーナスのように、細かいところを本物に似せてつくるのは難しく、作り方を教えてくださいました方(尖石縄文考古館職員の前藤佐和子さん)はとても簡単そうにつくっていましたが、そう簡単につくれるものではないと思いました。縄文のビーナスを見ていると、縄文の人は手先が器用で発想豊かな人びとであったと感じます。

茅野市5年 両角歩美 記者

ダンスで心をつなぐ



私の班は、縄文時代のダンスや音楽について教えてもらいました。まず始めに、縄文太鼓グループ「森の精霊」のみなさんに、土器にシカの皮をはった太鼓のえんそうを聞かせてもらいました。すごくは力があって、心にひびき、これから冒険が始まるみたいなドキドキした気持ちになってきました。

このあと、かん頭衣を作りました。麻のふくろに、絵の具の赤と黒を使って模様をかかんですが、何回も同じ所をぬらないと線がかすれちゃって大変でした。だけど、上手にできてよかったです。

それから、かん頭衣を着てダンスをしました。太鼓のリズムに合わせるのがむずかしかったですが、お祭りの時みたいに楽しい気持ちになってきました。宮下健司先生(元県立歴史館総合情報課長)によると、縄文人にとって、お祭りは大切なものだったようです。この時代の村は円形に家がたてられ、真ん中には広場がありました。その広場で祭りがおこなわれていましたが、祭りは夜だったそうです。やみがぶ合そうちになるからです。暗いとき真ん中で火をたくと、みんなの気持ちが集まります。仮面をかぶった人が、太鼓や笛、笛にあわせておどり、これにより、村で一緒に生きていくという気持ちが高まったそうです。自分もみんなとおどって見て、心が一つになった気がしました。

長野市6年 西田瑞希 記者

部品を組み合わせる「技術の原点」



私たちの「縄文の料理」班では、できるだけ自然にあるものを使って、調理をしました。私が一番おどろいたのは、縄文人のすぐれた技術です。ガスも電気も調理器具もない時代に、知恵と工夫で、ものを煮炊きする土器や、黒曜石を加工したナイフを生み出しました。

教えてくれた宮下先生によると、縄文の道具の中でも、縄文時代に発明された弓矢は、黒曜石の矢じりとえの部分を組み合わせる、つまり「部品と部品を組み合わせる」という技術の第一歩だったそうです。現代では、コンピューターやロケットなど、複雑な「部品と部品の組み合わせ」によって成り立つものが多くありますが、そうした現代の先人技術の原点が縄文時代にあったということです。